



街を歩くのは男性ばかり



ショッピングを楽しむ女性たち

女性の活躍が国の将来を

ダッカに到着して最も驚いたのは、人の多さだ。空港から中心地への道、店、広場など、あらゆるところに人がいる。線路沿いを歩けば、列車の屋根に乗客が乗っているという、写真でしか見たことのない光景が飛び込んできた。

赴任先は「ダッカ」。そう言われて、それがどの国の首都なのかさえ知らなかった筆者が、1年間の駐在を命ぜられてバングラデシュのシャーヅラル国際空港に到着したのは、11月下旬。日本ではそろそろコートが必要になる季節だ。だが、長い雨期が終わったばかりの当地では、過ぎしやすい乾期が始まろうとしていた。乾期の始まりは、蚊との戦いの始まりでもある。人も多いが蚊も多いこの国で、幼い頃から蚊に刺されやすい筆者は、早速蚊の洗礼を受けることになった。かゆみを我慢しながら、縁もゆかりもないこの地で過ごす1年間に、少し自信を失いそうになったことを思い出した。



乗客が手を振ってくれた

映画監督の宮崎駿さんは「女性が元気な国は発展する」と言う。

米国のフォーブス誌が作成した「2016年版世界で最もパワフルな女性100人」という番付にランクインしたのは、31カ国・地域の女性たち。残念ながら、その中に日本人はいなかったが、日本とよく似た国旗を持つ国の女性指導者が36位に入った。バングラデシュのシェイク・ハシナ首相だ。女性エンパワーメント^注に注力していることでも知られる同首相は、「世界の半数である女性の活躍は国の将来を左右する大きな鍵になる」と主張する。



戦勝記念日を祝うケーキ

お母さんたちが集結

北海道の2倍ほどの土地に1億6,000万人が暮らすバングラデシュは、人口密度が高い国として知られる。首都

ダッカはもちろん、地方都市に行っても「人っ子一人いない」という光景に出くわすことは、まずない。街を見渡すと、男性の姿ばかりが目に入る。だが、ショッピングモールや衣料品の専門店街に行けば女性もいる。ショッピングを楽しむのも店の従業員も女性だ。

毎年1月にダッカで開催される見本市「ダッカ国際トレードフェア」に行けば、そんな女性たちをみることができる。これは、国内外の食品・日用品メーカーが1か月にわたって展示・即売を行うイベント。特別価格の商品を求めのお母さんたち



全国からお母さんたちが集結「ダッカ国際トレードフェア」

が全国各地から集結する。私も熱気あふれる会場に足を運んだことがあるが、両手いっぱいの買い物袋を男性に持たせながら、女性たちが目をきらきらさせショッピングを楽しむ姿に目を見張った。

夫の許可なく買物を

バングラデシュでは、女性は家庭にとどまるものという考え方が一般的だった。つい最近まで女性が外で働くことは社会的にあまり快く思われていなかった。しかし、縫製産業の発展により女性の雇用機会が拡大したことや、非政府組織（NGO）による女性エンパワーメント活動が、

女性の社会進出という変化を受け入れる素地を生み出し始めているようだ。ザラ、H&M、ギャップ、アバクロンビー&フィッチ、ユニクロなど、欧米や日本ブランドのアパレル工場が立ち並びこの国は、今や中国に次ぐ世界第2位の衣料品輸出大国だ。この主力産業を支えているのは女性たちだ。初めて日系縫製工場に見学に行った時のことを今でも鮮明に覚えている。およそ1,000人の女性従業員がミシンを踏む姿に圧倒された。この工場で働くある女性は、「自分が働いて得たお金を家族や自分のために使えることがうれしい」と笑う。別の女性は「夫の許可がな



ライチを仕分ける女性

くても自分の判断で好きなものを買うことができるようになった」と胸を張る。女性の雇用機会拡大が、旺盛な購買力や家庭内の地位向上に好影響を与えているのは間違いない。

ヘリコプターの前に立つ軍服を着た2人の女性——ある日の地元紙に大きく掲載された写真だ。記事は、バングラデシュ空軍初の女性パイロットの誕生を報じていた。男性が就くイメージが強い職業であっても、女性が活躍し始めていることを実感した。筆者の身近なところにも活躍する女性がいた。バングラデシュ代表としてゴルフのアジア大会に出場した女性だ。彼女は、滞在中よく通ったゴルフ場で仲良くなったキャディーさん（バングラデシュのキャディーは100%男性）の娘さんだ。スポーツの世界でも女性の活躍が目立ち始めた。



縫製工場働く女性たち

女性の地位は日本よりも上

日本に目を転じれば——。2015年8月に女性活躍推進法が成立、翌16年4月に施行された。これにより、一定規模以上の企業や組織は、女性活用に関する行動計画の策定が義務付けられることになった。安倍晋三首相が掲げるウーマノミクスは、人口減少、市場縮小が懸念される日本社会において、さらなる女性の社会進出による経済活性化への期待が込められている。世界経済フォーラム発表の「ジェンダー・ギャップ指数（15年版）」では、バングラデシュは64位で、101位の日本よりも上位にランクされた。「バングラデシュにも活躍する女性はたくさんいる。こうした女性の生き方や働き方は日本人女性の参考になるかもしれない」という上司のアイデアをありがたく頂戴し、活躍するバングラデシュ人女性へのインタビューを開始した。政界、ビジネス界で活躍するあらゆる世代の女性や、女性エンパワーメントに取り組む男性経営者など、計18人に話を聞く機会を得た。今回はその中から、働く女性の端くれである筆者が勇気付けられた「女性の強み」について、エピソードを交えて紹介したい。

女性の4大武器

女性の強みについて聞いた。いろいろな意見が出てくるかと思われたが、以下の四つに集約された。

①細部への気配りと思いやり、②寛大さと我慢強さ、③マルチタスク能力、④コミュニケーション能力。

日本人から見ても、女性の特徴として同意できるものばかりではないだろうか。もちろん個人差もあると



- ①ターアグ川に沈む夕日
- ②蛇（コブラ）使い
- ③郊外の小学校にて
- ④犠牲祭（イード）の休暇で訪れた友人宅
- ⑤ダッカ大学の学食
- ⑥ダッカ大学校内の富士山の壁画



思う。仕事をしていて寛大さが足りないなと反省したり、スケジュール管理を誤ったり、うまくいかないことはしばしばだ。

サヒラ・ズベリ・ヒミカさんは、IT会社を立ち上げた女性起業家だ。

「目標達成のために、仕事に関するあらゆることに気配りを欠かさないこと」が女性の強みだと語る。ファッションナブルで、歌手活動もしていたという彼女は、職場環境の充実にこだわる。風通しのよいオフィスを



- ①歌手でもあるヒミカ社長
- ②オフィスはくつろげるレイアウト
- ③チョードリー議長（左から2番目）と筆者（同3番目）
- ④カビール社長

目指すという言葉どおり、仕切りがほとんどなく、家のようにくつろげるレイアウトだ。また、「男性には男性の、女性には女性の視点やそれぞれの得意分野があり、それらが相乗効果を生む」とも語る。部下の男性は、「マーケティングは女性の感性が発揮される分野だ」「女性がいるチームは、売り上げが上がる」と女性の視点が良い結果につながったと話してくれた。

シリル・シャーミン・チョードリーさんは、バングラデシュ初の女性国会議長だ。国会議長と聞いて厳しい人柄を想像していたのだが、非常に穏やかで器量の大きな方だった。バングラデシュでは、国会議員にクォータ制を設け、積極的に女性のポストを増やす取り組みをしている。女性の強みとして、対話を重視して、多くのことを同時にこなせる点を挙げる。「実際に350人の議員を取り

まとめ、議事を仕切ることができているのは、マルチタスク能力とコミュニケーション能力による部分が多い」と言う。女性・児童省の大臣も務めた彼女は組織のキーポジションに女性を配置することの重要性を強調した。

ソニア・バシル・カビールさんは、マイクロソフト・バングラデシュ社長。バレーボールとクリケットの元バングラデシュ代表選手。夫とともに米国に渡り育児と大学進学を両立させた経験を持つ。「人生において男女ともさまざまな問題に直面するのは必然」と語るカビール社長は、「女性は働き続けるか、辞めるかの決断を迫られる時が来る可能性が高いが、その時にはできるだけ仕事を続ける道を模索してほしい」と言う。「自分の仕事に自信を持つこと、自尊心は一生懸命働くことで満たされる。“私はできる”という姿

勢を常に周りに示すことがコツだ」とアドバイスくれた。

列挙した3人の女性以外にも、さまざまな分野で活躍する多くの女性にインタビューした。共通していたのは皆、「自分を理解し、自分なりのスタイルを確立している」という点だ。そうしたスタイルは持って生まれた才能だけではなく、自身の経験を通して培われたものだ。マイクロソフトのカビール社長のモットーは「人生とは90%の心構えと10%の素質で作られる」という。あらためて女性の強みを認識し、強化していくことで、新たな活躍の道が開けるのかもしれない。

バングラデシュで多く見かけるもの。それは蚊、人……。そして、増えつつあるもの、それは各界で活躍する女性たちだ。



(田中 麻理/ジェトロ海外調査部アジア大洋州課)

注：自立性を促しそれを支援すること。